

佑 啓

ゆうけい

発行者

社会福祉法人 佑啓会

理事長 里見 吉英

〒290-0265

千葉県市原市今富 1110-1

TEL 0436-36-7611

FAX 0436-36-7612

編集者 広報委員会

新たな出会い

坂本 光弘

昭和五十八年の冬は二十年ぶりの厳しさであった。今でも鮮明に覚えている。十二月の理学療法士養成校の受験当日は特にひどい雪にみまわれ、電車に乗れたはいいのもの、降り続く雪に気をもみながらようやく上越地方の片田舎、直江津駅に降り立った。「こんな日に限って…」実は家は新潟県の中央部海岸寄りにある弥彦(やひこ)村。山間部と違い積もっても二m前後で、五mを超える雪は初体験である。

直江津駅から試験会場の国立犀潟(さいがた)療養所付属犀潟リハビリテーション学院(以下「犀潟リハ学院」という。)までは路線バスでの移動となる。バスに乗っても雪壁で景色は見え、前方にならぶ車の尾灯がどこまでもどこまでも続いている。焦る気持ちを押さえ込み、遅々として進まないバスに身を揺らして



る。途中にある糸魚川の親不知(おやしらず)海岸で青く綺麗に輝く砂浜を男だけで眺めていた事もある。その日の授業は寝ずに受けたがまったく記憶に残っていない。寮での飲み会は毎月開催され、お酒の調達は一年生が担当する。近隣に新潟県の銘酒三梅(越乃寒梅・雪中梅・峰乃白梅)の内、雪中梅の醸造元がある。ここでは午前七時十五分から個数限定(十五本のみ)で電話販売を行っている。購入担当者へは「日本酒は雪中梅を四本以上ゲットするべし」という課題が与えられる。電話のコツは先輩から教わった。そのコツとは(大したことではないが…)二人一組で電話をするのである。一人はプッシュボタンを押す役割。リダイヤル機能を使うよりもかけ直す方がスピードは速くなる。電話番号を間違えずにプッシュボタンを早く押すことに命を掛けなければならぬ。もう一人は繋がらない時、受話器を切る役割。繋がった時に電話を切らない判断力が重要である。

携帯電話は普及していなかったので、公衆電話を使用した。寮内の電話はダイヤル式だったので、国道沿いの公衆電話まで走った。



遊んでばかりいた訳ではない。学習した中で一番印象に残っているのが、解剖学実習である。実習は新潟市内にある新潟大学医学部へ出向き、献体を使って人体解剖を行った。人の体にメスを入れるのは最初で最後の体験だと思う。筋肉は骨に付着し、ゴムのように伸び縮みすることで関節が動く。教科書で学んだ知識通りに筋肉や神経・血管・骨が成り立っているかを、メスを入れながら確認

した。献体は腐敗防止の為、ホルマリン漬けになっている。ツンと鼻をつく臭いに悩まされながらもテキストと睨めつこしながら解剖を進めていく。当たり前であるが筋肉は立体的で奥行きがあり深層筋肉(以下「インナーマッスル」という。)と表層筋肉(以下「アウターマッスル」という。)は膜繊維で分離されている。例えば胸の筋肉は大胸筋が有名であるがこれはアウターマッスルである。大胸筋の深部に小胸筋という筋肉がありインナーマッスルにあたる。役割としては、アウターマッスルは運動する時のメインパワーを生み出す働きで、インナーマッスルは主に安定感・調節能力を高める働きをもつ。今、話題のインナーマッスルトレーニングは理屈に合ったとても良い手法である。

丸一日の実習で若干名の途中棄権者はあったが、私を含め殆どの学生は興味を持って人体解剖を体験し、人の筋肉や神経・各臓器の位置関係を把握する事で、その後の専門科目を理解する基礎となった。



理学療法士になる為の学習二千七百時間の内、千時間以上を臨床実習に費やした。一・二年生の内に臨床実習以外の単位をクリアし、三年生は卒業論文の作成と共に、殆どの時間を臨床実習に費やした。実習では三つの施設にお世話になった。

その内の一つが社会福祉法人身体障害者福祉事業団千葉県千葉リハビリテーションセンター(以下「千葉リハ」という。)である。私自身が小児理学療法を行いたいと第一希望の実習地としてお願いしていたので、実習するチャンスを得られ楽しんでいた。知識も技術も未熟であり重複障害児は担当させてもらえず身体

障害のみを有する入園・通園・母子入園の脳性まひ児を担当した。その中でも母子入園の児童を訓練している時は、必ず母親が同席するので母親の視線をブレッシャーに感じ、秋風が涼しい穏やかな季節であったのに大粒の汗を流しながら訓練していた記憶が鮮明に残っている。

充実した支援センターの仕事であったが、鶴舞荘での佑啓会職員との出会いを忘れることが出来ずにいた。今まで自分を育ててくれた千葉リハに感謝しながらも「佑啓会で働いてみたい。千葉リハで培った知識と技術をここで生かしてみたい」という思いを抑えることが出来ず、飯田次長に仲介を依頼し里見理事長にお会いする機会を作って頂いた。



生まれ育った新潟での生活が二十一年であるのに対し、いつの間にか千葉での生活が二十八年と長くなる。第二の故郷である千葉での、そして佑啓会での大切な思い出をたくさん残すべく前進しようと思う。



現在は理学療法士として、ふる里学舎静風荘を拠点に市川市松香園・アネッサデイセンター・市原市福祉会館・ふる里学舎木更津療育支援に関わっている。

(ふる里学舎静風荘 支援課長)

手抜き画家

シマツタなり

島田 芳宏

絵を始めるきっかけは十七歳のころに入所していた施設の同室者〇君(その後四十年來の悪友)の「お前も絵を描いてみる!」という一言だった。別の同室者T君が「お前もタイプライター持っているならやってみないか。」と見せてくれたタイプアート(タイプライターの文字や記号を組み合わせて絵画的表現をする藝術のひとつ。)に感動して自分でもやってみた。当然ながら上手くはいかなかった。でも、意外と細かい作業が私には合っていたようで以後三年間楽しく制作していた。

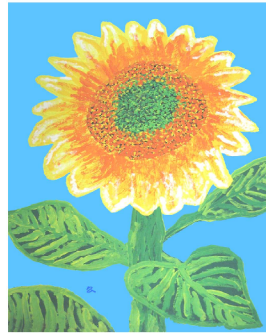
一九八〇年に日本肢体不自由児者協会が主催するタイプアートコンテストに「どうせ駄目だろ。」と気楽に出品した作品が初入賞して驚いた。それがきっかけとなり画業の道へ、貧乏画家の生活に踏み入ることとなる。



この初入賞から個展を開くまでの十一年間はコンテストやコ

ンクールに出品しまくり、数度は入賞したが落選、選外、選漏れは何十回あったのか不明、記憶に残らないほど落とされた。

一九八五年にパソコンを購入し、一九八八年からCGを始め、CGが以後の展示活動の大きな力となってくれたが同時にかなりの費用がかかり貧民に突き落とされる原因となる。一九九一年に自宅のある隣町喫茶店で今まで描いた、タイプアート、サインペン画、CG、水彩の寄せ集めの個展を開けたのは大きな喜びと自信になった。



そのころの私はブライドばかり高くて、「何ヶ月もかかって描いた絵を安く売りたいくない。」との思いから高値を付けていた

ので絵は一、二枚しか売れなかった。「絵を売らないと金銭的にやっていけない。」と喫茶店の店主から絵を売る方法を教えてもらった。この喫茶店で五年で四回の個展を、三年連続で新作展を開けたのはその後の展示活動の礎となったのだった。

一九九六年からは木更津にある特養の理事長さんのご好意で施設内の喫茶ルームで個展を開かせてもらえるようになり、一九九八年から二〇〇六年の九年連続で新作展が開け、二〇〇四年には佐倉市の川村記念美術館の別館で個展が開けたのは大き

な誇りとなっている。

こうして書くとは順風満帆な画家人生を送ってきたように思うが、二十代の頃には町で暮らしたいという強い思いを諦めさせられた。背中痛でタイプアートを辞め、腰痛でサインペン画を辞め、突然の首の激痛から当時絶好調だったCGをほぼ十年休止した。そして、二〇〇七年に転倒して足を骨折、以降は新作展は開いていない。とまあ挫折の連続のような我が人生だった。が不思議と描きたいと言う想い、画家の情熱だけは消えることはなかった。

静風荘に引っ越して三年、棟の多目的ホールを借りて、画家として描き続けていられるのも職員の方々のご理解とご協力のおかげと深く感謝をしています。今後とも制作に励み、「日本は千葉県市原市のふる里学舎静風荘に手抜き画家シマツタありが。」と言われるようになるというが…。

(ふる里学舎静風荘利用者)

島田さんは、ユニモアあふれる方で利用者さんや職員ともユークな掛け合いをされています。今回の佐啓にも「青空ひまわり」とおじさいの二作品を提供して下さいました。

タイトルにあります。手抜き画家シマツタとは島田さんのペンネームであり、シマツタは昔のあだ名で手抜きとは手を使わず足だけで筆やPCを操作する為だそうです。現在も多目的ホールのアトリエで絶妙な足裁きで創作活動に精を出しておられます。

夢かなえて

生涯現役

下無敷 和代

私が初めてふる里学舎にお世話になったのは、平成八年十一月に一級ヘルパー課程を受講した際の実習でした。知的障害者施設とはどんなところなのだろうと一抹の不安を抱えての実習でした。その中で今でも鮮明に記憶していることがあります。椎茸栽培を行うために切り出した時のことです。

それにしましても実習をさせていただいている期間の職員の方々の丁寧な指導とさわやかな挨拶はとても心地良かったのです。というのも開設間もない介護老人施設に就労していた私はその職場での曖昧な挨拶や立ち振る舞いが気になっていたのです。社会人として最低限身に付けて欲しいといふふる里学舎の職員の方々の大きな声でさわやかな挨拶をお手本にさせていたのだのです。そして、心の隅でふる里学舎という職場で働いてみたいと思う私がいました。



あれから十八年、夢がかなってふる里学舎の職員として今年で四年目を迎えます。最初の年は鶴舞荘に配属されました。直接介護と医療の仕事に関わることにになり、迷路やパズルを思わせるような居室や食堂に混乱しながら日々、目の前の事をこなすだけで精一杯だった印象があります。十八年ぶりに直接介護を支援させていただいた時には介助技術の理屈はわかっていても失敗することがあり、それでも「いつもありがとう。」と笑って言うて下さる利用者の方の言葉が心の支えになったものです。

六月中旬にふる里学舎静風荘へ引っ越すことが決まり、荷物の整理などにてんやわんやの日々でした。(利用者の方々は静風荘は個室でホテルみたいだととても楽しみにされている様子でした。)(引越しの当日には佐啓会の事業所の職員の方々が手伝いに来てくださいました。段取り良く手早い作業に佐啓会の繋がりが



と底力を見たような気がしました。

翌日、二階のA棟からB棟へ移動する動線が長く両足が棒のようになること数回、ふる里学舎の接遇のモットー「明るく、元気に、爽やかにそして品良く」を忘れてしまう程、足が痛く愚痴がでたこともありましたが、朝出勤して、「おはようございます。」と声をかけると、元気に挨拶を返してくれる人、身体全体で笑顔を見せてくれる人：利用者の方々の表情が私の元気の素になりました。私の一生懸命な姿勢にこそ利用者の方に大きな安らぎを持っていただけではないかと信じ支援させていただく日々でした。

二、三年目は医療で利用者の方の健康管理に関わり医療面での専門分野を学べ、自身の知識の広がりを感じました。

今年の四月の異動でA棟に配属され、現在は生け花教室で流派的な花を利用者の方と活けながら笑いの絶えない時間を過ごしています。余暇活動をいつまでも続けて行きたいと思う瞬間です。

(ふる里学舎静風荘 専門員)

編集後記

梅雨入りの季節となりました。雨の日には水の香りを感じ、晴れの日には夏を感じます。そんな季節の移り変わりと共に佐啓八十八号をお届けします。

斎藤 慎太郎

